

ADHD の子をもつ母親の「適切な対応」をめぐる考察

——母親によるペアレント・トレーニングの事例から——

大阪市立大学大学院 佐々木洋子

1 目的

本報告の目的は、ADHD の子どもをもつ母親の子育てに求められる「適切な対応」について、どのような対応が「適切」と考えられているのか、また、そうした「適切な対応」のための課題を、母親自身の取り組みから明らかにすることである。近年、ADHD をもつ子どもへの「適切な対応」を学ぶ場として、ペアレント・トレーニングが注目されている。ペアレント・トレーニングとは、ADHD などの子どもを持つ保護者が、行動療法の理論に基づいて、より適切な子育ての方法を学び身につけるためのトレーニングであり、グループ単位で行われる。ペアレント・トレーニングについては、その効果は検証されているものの、具体的な実践についてはあまり明らかになっていない。そこで本報告では、ペアレント・トレーニングでのやり取りを検討しつつ、そこでの「適切な対応」について明らかにする。

2 方法

本報告で扱うデータは、2012 年度に行われた 2 つの ADHD (や他の発達障害も含む) の子どもをもつ親に対するペアレント・トレーニングにおける参与観察と、両プログラム終了後にインストラクターに対して行ったインタビュー調査から得られたものである。本事例の特色は、このインストラクターが医師やカウンセラーなどの専門家ではなく、ADHD の子どもをもつ母親であることである。したがって、本事例は、母親による母親のためのペアレント・トレーニングという性格を持っている。

3 結果

ペアレント・トレーニングへの参加者は、褒めて育てることで子どもと良好な関係を築きたいと考えているものの、実際にどのように褒めたらよいかわからないという悩みを抱えていた。これへの対応として、本事例のペアレント・トレーニングでは、行動観察により子どもの特性を理解すること、自身の価値観を変え、子どもにはできないことがあることを認める、という 2 点をとくに重視していた。前者は、子どもとの関係性において、invisible で familiar であるという ADHD の特性 (渡辺・中田, 2003) への対応であり、後者は、父親や家庭以外の場所 (例えば「学校」やより広い「社会」との関係性において母親の役割を捉え直そうとする試みである。また、ペアレント・トレーニングは、それ自体がセルフヘルプ・グループとしての側面を持つことも指摘できる。

4 結論

本事例では、子どもへの「適切な対応」をめぐる、インストラクターと参加者間での様々なやり取りが見られた。何が「適切な対応」かについては、母親は、子どもとの関係性だけではなく、父親やより広い社会との関係性のなかで捉えようとしていることが明らかになったが、このことは、特性に対する理解が得にくいという ADHD をもつ人の置かれた厳しい状況と関連している。また、こうした実践が、母親の責任を強化するイデオロギーとして働く危険性にも留意が必要であろう。

文献

渡辺隆・中田洋二郎, 2003 「AD/HD を持つ子の保護者に対する心理教育についての考察」『福島大学教育実践研究紀要』44: 17-24.